

アダムスキー問題は 米国の最高機密!!

レナード・ストリングフィールド

梶野修平：訳

■コンタクトがウソなら、当局はなぜ否定しないのか

…現在、U F O 論争に於ては、互いに正反対の立場にある二つのグループが存在する。一方は各国の政府機関であり、U F O を幻覚であり科学的に有りえない存在であると説明する声明をたびたび出している。もう一方は他の惑星から飛来した宇宙人と直接コンタクトしたと主張する人々のグループである。…

1954年に私は、このような間違いだらけのドタバタ劇に終止符を打つために最初の具体的行動を開始した。

二人の男が、私の住む町で講演会を開く予定だったのである。この二人は著書の中で自分たちがコンタクトしたと主張しており、もっぱらそれらの本の販売促進を目当てに当地に滞在中であった。もし連中の主張が嘘だとすれば、当局はなぜ連中にこの町で勝手なことを言わせておくのか、私には理解できなかった。要するに一市民がこのことで抗議したとすれば、当局が何もしないはずはないと考えたのである。そこで私は実際に市の当局に抗議したし、F B I や空軍、そのほかにもいくつかのしかるべき政府機関に抗議した。私の抗議を却下したF B I の返事はこうである。要するに問題の二人は個人的意見を述べているにすぎず、個人的意見を述べる権利は彼らにも保障されている、というのだ。だが、宇宙人とコンタクトしたと主張する、これらの連中が売り出した本は、どれも「ドキュメンタリー」だとか「事実」だとか「真相」だとかいった殺し文句がデカデカと踊っているのである。

こうした時期に、私は妻と共に空軍のライトパターソン基地にある空軍情報部で、当時副本部長を務めていたジョン・オマーラ中佐を訪問した。中佐は私たちと会談中、問題の連中が隠れもないホラ吹きであることを改めて断言し、さらにドナルド・キーホー少佐（民間のU F O 団体としては世界最大の会員数を誇っていたN I C A P の創設者）に関しても鼻からバカにしてみせた。また中佐は「飛行中の空飛ぶ円盤が写っているとかいうトレモンダかモンタナだかの映画フィルムのようなものは全く存在しません」と言明した。とはいえ今日でも多くのアメリカ国民が、映画館で円盤が写っていると称する問題のシーンにお目にかかっているのである。中佐は、多くのジェット戦闘機が追跡カ

メラを掲載していることを認め、それは、U F O問題をさらに調査するためであると語った。……

■アダムスキーの宇宙船同乗に立ち合った科学者たち

翌1955年は、U F Oの目撃事例も宇宙人とコンタクトしたと称する報告もさらに増大した。空飛ぶ円盤を扱った本や雑誌やダイレクトメールの出版物は、どれも発行部数を伸ばす一方だった。当時、私はこう考えたものだ。要するに「ペテン師」どもがせっせと自分たちの思い通りに人々から金をまきあげているというのに、わが合衆国の郵政当局（連中は図々しくも我が国の郵便制度を悪用しているのだ）のおとがめなしとは、いったいどうゆうわけなのか、と。いずれにせよ私は、これらの本の中の一冊を郵便を利用して購入した。書名は『空飛ぶ円盤同乗記』、著者はジョージ・アダムスキーである。だが私はこの本を購入する前に、それをよく調べ、法律的に見て極めて傷付きやすい“アキレスけん”（弱点）を発見していたのだ。この件における“アダムスキーのアキレスけん”は、彼自身の以下の文章にある。

「私が宇宙船に同乗して行った旅行の一つについては、ちゃんと複数の目撃者がいる。二人とも高い地位にある科学者である。いったん彼らが声明を発表することが可能となれば、状況は一夜にして変わるに違いない。しかしながら、あらゆることが安全保障上の措置として機密扱いされるような現状を考えるならば、彼らとしてもここ当分の間は今までどうり人目につかぬようにしてゆかざるをえないのである。だが、二人はこう言っている。もし国の防衛も自分自身の身の安全も危機にさらさずに自分たちの握っている証拠を公表できると確信できる時が来れば、その時はマスコミを通じてそれを公にするつもりである、と。……」

この陳述のおかげで（この部分はある意味でアダムスキーの体験を科学的に実証するものになる）この本は、彼の個人的見解の産物であることをやめてしまい、法的手段による真偽の追求を免れない事実の申し立てへと変身したのである。

「ペテン師」どもを一向に取り締まろうとしない政府のやる気のなさに腹を立てた私は、この問題を自分で押し進める決心をした。

問題となった本はジョージ・アダムスキーの著書である。私の見解では、アダムスキーは、連邦裁判所に召喚されるべきであった。そうなれば彼は例の二人の科学者の証言によって、自分がほかの惑星から飛来した宇宙船に本当に同乗したことを立証できるわけではないか。

もちろんこのことは、政府の側にも、真相を主張する機会を与えることになり、従ってもしアダムスキーが前述の科学者たちを提示する事ができなかった場合は、政府は彼（アダムスキー）を合衆国の郵便制度を不法に利用して詐欺行為を行ったかどで告訴できるのである。

■C I A長官からのアダムスキーに関する回答

私は弁護士をしている友人に電話をかけ、問題の状況を説明した。彼の返事

では、どうやら私には訴訟を起こすだけの言い分がありそうだ、とのことであった。

この件に関係のある各種の政府機関に対する敬意の念から、私の弁護士はある下院議員に仲介者として働いてくれるよう依頼した。最初のうちはこの下院議員も、私たちが冗談を言っているものとしか思わなかった。だが私の弁護士は、私たちが本気だということを彼に納得させた。そして私たちは、この下院議員に具体的な行動計画を説明したのである。

「私が点検してみるまでは何もしてはいけません」というのが彼の忠告であった。私たちが何もせずに待っていると、やがて彼からワシントンにある某政府機関に手紙で問い合わせさせてみてはどうか、と言ってきた。私たちは言われたとおり手紙を出したが、これに対する返事は前もって用意されたもので、その余りにもひど過ぎる言い逃れぶりには、ふだんは極めて穏健である友人の弁護士でさえ腹を立てたほどである。

「われわれにこんな返事をよこすなんて、連中は何様だと思っているんだ。こうなったら最後までやり通してやるからな。」

だが、彼が例の下院議員に電話すると、相手は、どうか自分がワシントンに連絡をつけられるまで、もう一度だけ何もせずにこらえてくれと言う。その週のうちに、私の弁護士から、事務所まで来てくれとの電話が入った。

彼が受け取った今回の回答書にも、全ての当事者が各種の公式声明には関係や責任がないと主張するように、との指示が含まれていた。

今回、私たちが受け取った公式声明それ自体は、CIA長官アレン・ダレスの手になるものであった。

ダレスは、こう言っているのだ。

確かに貴下に置かれましては、連邦裁判所で訴訟を起こすだけの事由をお持ちです。しかしながら、もし必要とあらば、差し止め命令を発動することによって、本官は何びとといえども、法廷でこの書物（『空飛ぶ円盤同乗記』）に関する証言を行わせないつもりでおります。なぜならUFO問題に関しては最高度の機密保全が存在するからであります。

私の弁護士は、もし差し止め命令を発動された場合は、私がにっちもさっちもいかない状況に追い込まれ、逆訴訟の対象となりかねないことを入念に指摘し、この訴訟は中止した方がよいと忠告してくれた。

（『緊急非常事態：UFO攻略記』から「アダムスキーが告訴されなかったのはなぜか」より）

訳者注記：この文章の著者は、アダムスキーを頭からベテン師と決めつけ、彼なりの正義感から、アダムスキーを法廷にひきずり出そうとしたわけです。しかし、何とCIA長官じきじきの警告を受けて断念せざるをえなかった、というわけです。このように、反アダムスキー派の人物が書いた文章であるだけに、かえってアダムスキーの主張の正当性が計らずも傍証される結果となったのは、まことに皮肉と言うほかありません。